◆講義⑧〔子どもの読書と学校図書館〕への質問◆

質問１

子どもの読書と電子書籍の関係性についてお尋ねします。

８月３日に文部科学省が公表した全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）の結果の報道によれば、読書が好きな子どもほど正答率が高いとのことです。現在、学校の教科書は紙とデジタルのハイブリッドで、子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画においても、電子書籍も読書に含むとされています。しかし電子より紙媒体の方が定着率がよいとの調査もあり、図書館での電子図書の導入に懐疑的な意見も根強くあります。現在、自館では、電子書籍は未導入ですが、市内の公立小・中学校に対しては県立図書館の電子書籍の利用を勧めています。電子書籍による学力向上などの実証があれば、電子書籍の活用の後押しになると思われ、適切なデータがあれば紹介いただきたく存じます。

回答１

残念ながら,「電子書籍による学力向上などの実証」データがあるかどうかわかりません。ただ,「電子書籍の利用と学力」の相関を求めることは無理ではないでしょうか。電子書籍をどのように利用するかが明確にされていないからです。

今年９月８日に発表された OECD の PISA の結果では,「読解力については、2015 年から 2025 年の間では OECD 加盟国平均で 28 点低下しました。これはおよそ１年半の学習差に相当します。」）という結果が示されました。これに対して，OECD の発表では次のように述べています。(PISA 2025：OECD 加盟国全体で読解力と数学的リテラシーの平均得点が急落)

> 2025 年 PISA 報告書はまた、人工知能（AI）とデジタル機器が使われる場合には、明確な目的のもと、節度ある利用が必要であることを示しています。過度な使用または学校で娯楽目的のためにデジタル機器を使用する生徒は、そうでない生徒よりも得点が低い傾向がみられました。

また，海外からは，デジタル教科書から紙の教科書への回帰や，SNS 利用の制限などの話題が届いていますが，私たちが考えるべきことは，デジタルの利用か紙の利用かという選択ではなく，それを使い分ける力を子どもたちに培うことではないでしょうか。デジタルと紙のそれぞれの特徴を知って，場面や目的によって使い分ける力をつけることが大切だと思います。そのために学校においては，子どもたちの発達段階や教科の学びのねらいなどを明確にし，それに適したデジタルの機器や資料，及びアナログの手段や紙の資料をどのように用意し，どのように使うかという授業つくり（授業設計）が必要です。

地域の図書館が市内の公立小・中学校へ電子書籍を貸出するにおいても，同様のことが言えます。利用する・しないの問題ではなく，どのように使うかということです。

ある子どもが学校図書館所蔵の本を読んでいたところ，借りようと思ったときにはすで

に貸し出されていたので，その本を公共図書館の電子書籍から借りて読んだそうです。学校図書館には読みたい本がなくても，公共図書館の電子書籍のなかに読みたい本を見つけることもあるでしょう。教科書で読んで好きになった作家の本を電子書籍でみつけてどんどん読み進めることもあるでしょう。接続数に制限がなければ，教科学習で同一の本をクラス全員がそれぞれ利用することもできます。公共図書館に行かなくても自宅や学校から本が借りられることは大変便利です。公共図書館に行きたくても遠くて一人では行けない子どももいます。文字の読みにくい子どもにとっては，文字を拡大して読んだり読み上げ機能を使ったりすることもできます。児童生徒にとって電子書籍は多様な学び方を保障したり，読書の手段を広げたりするものと言えます。

しかし，次から次へと本を選び端末の画面に出すことが面白くて，本を読んでいない子どももいます。発達段階によっては検索が難しい子どももいます。ちょっと眺めただけで，1冊の本にじっくり取り組めない子どももいます。誰が電子書籍の使い方・読み方を指導するのか，教科等の学びにおいて紙の書籍と電子書籍をどう組み合わせて使わせるのかなど，電子書籍を学校教育において発達段階を考慮してどのように利用させ指導していくのかについて，また公共図書館においては，利用者 ID を提供すればそれでよいのか，小学校 1 年生から中学校 3 年生まで児童生徒に同様の貸出サービスを提供するのかなどについて，学校側と公共図書館側が話し合い理解を深める機会があるといいと思います。